
ミレーユに恋ができない3つの理由

山田ハルコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミレューに恋ができない3つの理由

【Nコード】

N1835Y

【作者名】

山田ハルコ

【あらすじ】

年頃の令嬢、ミレュー。彼女はいまだ恋らしい恋をしたことがない。

その理由は、シスコンの兄がとことん異性を追い払ってしまうからであり、婚約者が淡い恋をことごとく碎いてくれるからであり、そんな二人をミレューが結局は許してしまうからなのだ。

恋に憧れるミレューと彼女を取り巻く日常のお話。に、なればいいなあ。

一話完結ほい感じでちょこちょこ続く予定です。

理由1、兄（前書き）

誤字をご指摘をいただいて改めました。教えてくださった方、ありがとうございます。

理由1、兄

ミレュー。

僕の愛しい天使。

僕の希望、僕の宝。

この世の醜さの全てからきみを守ってみせると誓おう。
願わくば今日も、きみが幸せでありますように。



白い手袋が投げられた。

「決闘を申し込もう、アダン伯爵」

金髪碧眼、甘いマスクの青年には、すらりと剣を抜く様が驚くほど似合っている。思わず状況を忘れて見とれ、ため息をつくギャラリー……ご婦人方に、青年は気まぐれなサービス精神を発揮し、にっこりと微笑みかけた。

「貴様っ、どういうつもりだ！」

きゃあ、と歓声を送るご婦人方の声に我に返ったらしいアダン伯爵が、投げられた手袋を怒りもあらわにたたきつける。

そのどなり声に一瞬で表情を冷たく凍らせた青年は、美しい碧の瞳で虫けらを見るようにアダン伯爵を見下ろした。

「どういうつもりも何も、言葉の通りだよ。日時も場所も、そちら

で指定していただいて結構。悔いのないよう、せいぜい腕のたつ介添え人を選びたまえ」

「ちょ、待ってくださいお兄様！」

青年：兄が腰にまわした手をようやく退け、ミレーユは彼に抗議した。

アダン伯爵が何をしたかって、夜会に来たばかりのミレーユに挨拶しただけである。言葉を交わす暇すらなく兄に決闘を申し込まれた。

どういふつもりだ、というアダン伯爵の叫びはミレーユの思いでもあった。

「伯爵は、わたしに挨拶をしてくださっただけで、」

「きみの美しい手を醜い手で取った。臭い息を浴びせ、汚い口を押しつけた。万死に値する行いだ」

「ちょ…」

あまりの言い様に、言葉が出ない。そんなあほうな、という衝撃がミレーユの頭を占領した。

とりあえず、兄の怒りの原因はアダン伯爵がミレーユにした“当世風のあいさつ”らしい。

確かに兄はミレーユの手を取り、甲に口づけた伯爵を掴んで引き倒すと、ものすごい力でミレーユを己に引き寄せ、気付いたときには手袋を投げていた。

こんなくだらないことで決闘を申し込む人間がどこにいる、と思うがミレーユに対して異常なほど過保護なこの兄に常識は通じない。さらに悪いことに、公爵家の嫡男で王家と縁続きという身分に生まれ、容姿端麗で頭脳明晰、剣術にも秀で王妃の騎士という地位まで手にする兄に異を唱えられる人間は少ない。

まさに無敵。好き放題してくれる。妹であるミレーユに関しては

特に。

「死ぬ覚悟はお早めをお願いします、伯爵。軽々しくミレーユに触れた人間が生き存えている瞬間が延々続くなど、おぞましい」

「……お兄様！」

ミレーユが睨むと、兄は冷徹非道そのものの表情を一瞬で引っ込めた。「なんだい、ミリィ」と返す声も瞳も砂糖菓子より甘い。

騒ぎに集まったギャラリーから羨望のため息が漏れるが、ミレーユには見馴れた顔だ。見とれることもほだされることもない。迷惑な兄をギッと睨んだ。

「決闘の申し込みなんて馬鹿なものは取り消して、伯爵に謝罪してください」

「優しい子だね、ミレーユ。けど、こんな男をかばう必要はないんだよ。突然汚い手で触られて、怖い思いをしただろう？ 僕がたつぷり苦しめてからあの世に送ってあげるからね」

「申し込みを取り消して、謝罪なさい。出来ないなら、お兄様のことを嫌います」

ミレーユの宣言がもたらした効果は絶大だった。

ざ、と血の気の引く音が聞こえる勢いで兄の顔が蒼白になる。美しい碧の瞳が受けた衝撃の大きさにグラグラ揺らぎ、唇が震えた。

「き、き、嫌いになるって、ミレーユ、お、お兄ちゃんは、そんな、」

「決闘の申し込みを取り消して、謝罪してください。そうしたら嫌いななんてなりません」

三度目の言葉に、兄は素早く伯爵に歩み寄ると、優雅な動作で跪

いた。

「大変な失礼を申し上げました、アダン伯爵。どうか、若輩者の狂言とお許しください」

この変わり身の早さ。怒りもあきれも通り越して感心したのはミレーユも伯爵も同じだろう。アダン伯爵は半ば呆氣にとられた表情で謝罪を受け入れた。

集まったギャラリーは何をしても様になる兄にうっとりで見惚れている。

…目を覚ませと言いたい。切実に。

「ありがとうございます、伯爵。…ひとつ、重ねて失礼を申し上げます
ることをお許しいただきたいのですが」

「…なんですか」

「金輪際、たとえ挨拶であろうと、ミレーユに触れることはおやめ
ください。不愉快です」

「……………」

「お集まりの皆さんも、覚えておいていただきたい。もっとも、私
を敵に回したいなら別ですが」

「……………」

この兄とやり合う覚悟を持ってミレーユに近づいてくる男は、い
まだ、いない。

理由1、兄（後書き）

感想、批評、いただけたら喜びます

理由1、兄（2）

「聞いたわよ、ミリィ。またやらかしたんでしょ？」

王宮で開かれた、女ばかりのお茶会の場。

顔を見るなり嬉々として駆け寄ってきた友人に、ミレーユは顔をしかめた。

「その言い方はやめて。私がやらかしたみたいに聞こえるじゃない」
「あら、貴女が原因なんだからあながち間違っちゃいないでしょう？だから、あの方と夜会に行くのはおやめなさいって言ったのよ」
「私だってお兄様とは行きたくなかったわ。でも、お兄様以外にエスコートしてくれる人がいないんだもの」

「…」

あの兄の存在を知らながらミレーユを誘ってくれる男はこの国にいない。

貴族同士のただの挨拶を決闘に発展させようとする兄である。それも、無駄に強いから始末が悪かった。誰だって命は惜しい。

「私、恋も知らずに結婚しなくちゃならないのかしら」

大きなため息をついたミレーユに、友人は同情半分面白半分の目を向けてくる。

「結婚相手に恋をしたらいいじゃない。恋を知って、しかも恋した相手と結婚できるわよ」

「…それは嫌。絶対に嫌」

公爵家に生まれたミレーユは、4歳の時にはすでに婚約者が決まっていた。お相手はこの国の王太子。

もちろん兄は今も昔も大反対だが、国が傾きでもしない限りこの決定は覆らない。大陸一の歴史と国土、権力を持つこの国で、次期王妃にふさわしい身分を持つ者は限られていた。

「なんでそんなに嫌うのか、あたしにはさっぱりわからないわ。顔よし、頭よし、お強くて人望も厚くて権力もある。貴女のお兄様と王宮の人気を二分してる方じゃない」

「それでも嫌。というか、無理よ」

「無理？」

「私はね、優しくされてときめきたいの。甘い笑顔を向けられて、ずっとときみといたい、とか言われて抱きしめられたいの。殿下は私がお嫌いだから、あの方に恋は出来ないの」

「あら、殿下が貴女のことを嫌ってるなんて初めて知ったわ。貴女の恋愛観も初めて聞くはずだけど、どこかで聞いたことのあるような感じね」

ミレーユの恋の理想は、今王宮で大ブームになっている恋愛小説だった。聞き覚えもあるだろう。

彼女と一緒に夢中で小説を読んだはずの友人は、物語上の恋愛に憧れるミレーユに肩をすくめた。

「あんなにかっこよくて強くてヒロインに一途で甘い男、小説の中にしかないと思うわよ。というか、現実にはいないから流行ったんじゃない」

「…そうなの？」

「そうよ。もっとも、貴女はあの方のガードのせいで異性と接する機会もないから、分からなくても仕方ないけどね。…そんなことより、殿下が貴女を嫌ってるって、どうして？」

友人は好奇心に目を輝かせて身を乗り出すが、ミレーユが話したす前に邪魔が入った。

「楽しそうだね、ミリィ。なんの話をしていたのか、僕にも教えてくれる？」

「お兄様…」

にっこりとほほ笑んだ兄に周囲は感嘆の息をつき、ミレーユはうんざりとため息をついた。

「なんでこちらにいらっしゃるったんです？」

「王妃様の警護、というのが建前」

美しい碧の瞳を細めた兄の後ろから現れた王妃に、お茶会の場に集まった全員が礼を取った。

「ごきげんよう、みなさん。お話を続けてくださって結構よ」

未来の義母は王妃の顔で一言かけた後、ミレーユを見て嬉しそうに破顔する。

「久しぶりねミレーユ、会いたかったわ。少し見ない間にますます美しくなったのね」

「もったいないお言葉をありがとうございます。王妃様こそ、相変わらずおきれいでいらっしゃいます」

「お義母様と呼んでもくれてもよろしいのよ？…そうそう、今度、わたくしの部屋にも顔を出してちょうだいな。あなたと話したいことがたくさん」

「はい、必ず」

ミレーユの言葉に満足したのか、約束よ、と華やかに笑いかけから他の者にも声をかけに去っていく。

兄と同じ制服を着た男が三人、すぐ後に続いた。

「お兄様は王妃様といらっしゃらなくていいの？」

「王妃様の警護は建前、と言っただろう？」

首をかしげたミレーユに、兄はまぶしすぎる笑みを向けてくる。

「本音は、きみに会いたかったから。愛しいミレーユ、僕の天使。ずっときみといられたらいいのに」

「お仕事をなさってください」

砂糖菓子のように甘い眼差しと言葉に、ミレーユは香辛料のように辛い眼差しと言葉を返した。

「僕の仕事を心配してくれるなんて、優しい子だね。きみと離れるのはつらいけど、僕がここにいてきみの瞳が曇るなら、行ってくるよ」

ぎゅ、と強い腕に抱きしめられる。

周囲から羨むような視線を感じるが、ミレーユは全く嬉しくなかった。公衆の面前、しかも兄妹で抱き合うなんて恥ずかしいだけだ。

「行ってらっしゃいと言ってくれないの、ミリィ？」

「イツテラッシャイオニイサマ」

見とれるような甘い笑みを見せて去っていく兄に、疲労感が一気に押し寄せてくる。

「…ねえミリイ」

一歩下がって一連のやり取りを見守っていた友人が、肩を落としたミレーユをつついた。

「あたし、間違っていたみたい。かつこよくて強くてヒロインに一途で甘い男は現実にはちゃんといるわ」

「なんでいきなりそんな話に戻ったの？」

「いきなりじゃないわ。貴女のお兄様、貴女の言ってた理想の恋そのままだじゃない」

「…私、なんて言ったんだったかしら」

「優しくされてときめきたい。甘い笑顔を向けられて、ずっとときみといたい、って言われて抱きしめられたい」

「……」

恋愛小説を読むのはやめよう、とミレーユは誓った。

物語の恋は現実にはない。憧れるのは不毛だったのだ。第一、登場人物が兄に見えてしまってもう読めない。

あの兄を持って生まれたために、ミレーユには恋の想像すら、遠くなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1835y/>

ミレーユに恋ができない3つの理由

2011年11月12日12時18分発行